

ルイス・ビンフォードと金関丈夫
－戦後の首里博物館をめぐる研究者群像－

山崎 真治

Lewis Binford and Takeo Kaneseke
－ A note of researchers at Shuri Museum, Okinawa after the WWII－

Shinji YAMASAKI

沖縄県立博物館・美術館，博物館紀要 第18号別刷

2025年3月14日

Reprinted from the
Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.18
March, 2025

ルイス・ビンフォードと金関丈夫 －戦後の首里博物館をめぐる研究者群像－

山崎 真治¹⁾

Lewis Binford and Takeo Kanesekei
－ A note of researchers at Shuri Museum, Okinawa after the WWII －

Shinji YAMASAKI¹⁾

Abstract

This article describes the early career of the world-famous archaeologist Lewis Binford in the Ryukyu Islands, and the research activities of anthropologist Takeo Kanesekei and his colleague under the direction of folklorist Kunio Yanagita during the same period. While working as an interpreter in the Ryukyu Islands under US military rule, Binford deepened his interest in archaeology and ethnography through his experiences in different cultures. A snap picture of Binford's donating scene of archaeological materials to Shuri Museum on March 6, 1954, is now kept at the Okinawa Prefectural Museum and Art Museum. Four days later, the research team led by Kanesekei visited Shuri Museum with the aim of gathering evidences concerning Yanagita Kunio's "Road of the Sea" hypothesis, and Kanesekei donated a number of ceramics to the museum. The Ryukyu Islands and Okinawa have been a contrasting point of interest from surrounding countries based on various concerns throughout the prewar and postwar periods, and the near miss between Binford and Kanesekei was an incident that symbolized these historical settings.

はじめに

今から70年前の1954年。この年は沖縄の歴史文化に関する調査研究と、保護継承の重要なターニング・ポイントとなった年である。そこには、日本と米国という二つの方向からの政治・社会的ベクトルと、戦前と戦後という二つの時代の潮流が交差していた。本稿では、このターニング・ポイントにおける象徴的な二人の人物、すなわちルイス・ビンフォードと金関丈夫について、沖縄地元の動向を踏まえつつ、彼らの事績をビッグ・マップの中に位置づけるとともに、従来あまり語られてこなかった考古学・人類学史の一側面を描写してみたい。

図1には本稿で言及する研究者について、公表されている論説やバックグラウンド、思想にもとづく

模式的マップを示す。やや乱暴な模式図であるが、大枠を理解するための補助資料として参照いただければ幸いである。

戦前の琉球・沖縄イメージ

1870年代に継起した琉球処分後の沖縄は、中国を中心とする諸外国と日本との政治的な駆け引きの舞台ともなっていた。実質的には日本政府から派遣された県令が置かれ、行政を取り仕切っていたが、旧慣温存政策により、王国時代以来の統治制度がなお維持されていた。また、中国（当時は清国）との外交関係も未確定であり、諸外国の影響も相まって、「分島問題」に代表される様々な問題が噴出していった。こうした中で、田代安定（鹿児島県出身）や笹

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

森儀助（青森県出身）といった「志士」らが、国防殖産の観点から琉球・沖縄の島々を実地に踏査し、旧慣や民衆の実情をつぶさに見聞して日本の中央に報告したことは、その後の考古学、人類学の分野にも大きな影響を与えることとなった。

このような琉球処分・分島問題を経て、沖縄の思想界でも近代化が計られていくことになった。戦前の琉球・沖縄の位置づけをめぐる歴史認識において、決定的ともいえる言説が鳥居龍蔵や伊波普猷らによって、主に考古学・言語学上の知見に基づいて提唱された「日琉同祖論」である（例えば鳥居1905、伊波1911）。一方、科学者であった金関丈夫は、1929年に琉球を訪れて多方面にわたる人類学的調査を実施し、客観的データに基づいて琉球人の位置づけを議論している（金関1930）。金関は、この時点においてすでに「日琉同祖論」のような単純な図式ではなく、多様性を含むまとまりとして琉球人集団を理解しようとしていたことは注目される。また、戦後九州大学に移った金関が、弥生時代人骨の研究にもとづいて牽引した「渡来混血説」は、同門の清野謙次の学説の影響を強く受けたものと言われる（坂野2022）。清野の「混血説」をはじめとする学説が、他方では大戦に向かう大東亜共栄圏の構想（多様なまとまりとしての大東亜共栄圏）を理論面で支持し、いわゆる総力戦を実現する要因にもなったことは、記憶されるべきであろう。

なお、1929（昭和4）年1月1日、金関丈夫は

琉球調査行の途上、鹿児島県指宿の橋牟礼川遺跡を訪れて踏査を行っている（金関1978）。そしてこれに先立つ1921（大正10）年1月2日には、柳田国男が海南小記の旅の途中、指宿を訪れている（柳田2009）。山崎五十麿によれば、柳田はこの鹿児島滞在の際に、たまたま京都帝国大学の濱田耕作と同宿した由である（山崎1930）。

サンフランシスコ平和条約と米軍統治

1945年4月の米国海軍軍政布告第1号、いわゆる「ニミッツ布告」で、南西諸島における日本の施政権は停止され、奄美・沖縄を含めた琉球諸島（Ryukyu Islands）の島々が米軍の軍政下に置かれた。1950年12月には琉球諸島の長期的統治を視野に入れた軍政から民政への移管が行われ、琉球諸島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands：USCAR）が発足する。1952年4月に発効したサンフランシスコ平和条約においても、北緯29度以南の南西諸島では米軍による支配が継続することとなった。

1951年に米軍は沖縄・奄美の民情調査を目的としたSIRI（Scientific Investigations in the Ryukyu Islands：琉球諸島学術調査）を立ち上げ、多くの科学者を送り込んで多分野にわたる情報収集活動を実施した（1954年まで）（泉水2009・2012）。SIRIに深く関与した研究者としてジョージ・マードックやジョージ・カーがいる。マードックはCivil

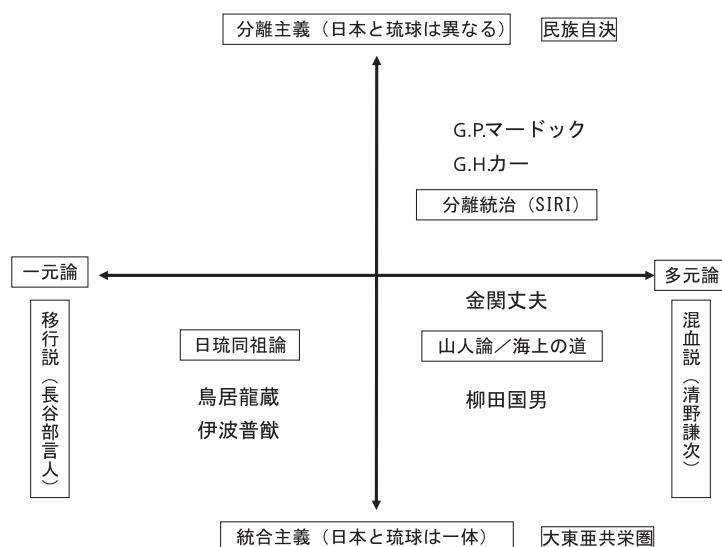


図1 本稿で言及する各研究者の論説・思想マップ

Affairs Handbook; Ryukyu Islands (琉球諸島民事ハンドブック) の編纂やHRAF (Human Relations Area Files) の開発・研究で著名なイエール大学の人類学者であり、沖縄戦の際に米軍とともに沖縄に上陸し、戦後の統治政策にも関与した人物である。カーは日本文化に関心をもつ美術史家で、戦前は英語教師として台湾に滞在し、金関丈夫らとも親交があった(泉水2022)。このほかにも、SIRIには多くの科学者や人類学者が参加しており、ウィリアム・リーブラによる民俗調査や、アラン・ウォーカーによる植物調査など、現在の観点から見ても貴重な成果が多く含まれていた。また当時、SIRIの科学者たちの通訳を務めた若き日のルイス・ビンフォードは、奄美・沖縄での異文化体験を経て、その後世界的な考古学者として活躍することとなった(Binford and Sabloff 1998)。なお、ビンフォードは1953年12月の奄美の日本復帰に伴う通貨交換にも従事しており、奄美の島々でも考古学的調査を行っていたようだ(前掲文献、安里2012)。

沖縄の文化復興と文化財保護法の制定

同じ頃、沖縄側でも米軍が設置した沖縄陳列館(Okinawan Exhibit)に端を発する東恩納博物館ひがしおんなと、首里郷土博物館(のちに首里博物館)を統合・充実して、米民政府の援助を得て首里博物館およびペリ記念館を新築・竣工し、文化財の収集・保護に取り組んでいた。1953年5月26日の落成式の際には、戦後行方不明になっていた「おもろさうし」等が、ペリー来琉百周年記念事業の名の下に米国から返還された(沖縄県立博物館1996、琉球政府行政首席官房1954)。こうした一連の文化事業の背景には、米軍による文化工作(離日政策)としての側面があったことは見逃せない。

また、文化財の荒廃を抑止するため、1954年3月には琉球政府の諮問機関として文化財保護調査会を設置し、同6月には日本の文化財保護法に準拠して独自に文化財保護法を制定するとともに、文化財保護委員会を設置した(園原2000)。

柳田国男の「海上の道」と日本人起源論

こうした米国・沖縄側の動向に対して、日本側からもアクションがあった。戦前から沖縄の民俗文化

に関心を寄せていた柳田国男は、1952年に『海上の道』を著し、戦後日本から分断された沖縄を日本人起源論の舞台として取り上げるとともに、稲穂を携えた古代の人々が黒潮海域を北上して、日本人の祖先になったのではないかという大胆な仮説を発表した。

そして1951年の柳田の國學院大学教授就任後、科学研究費による「南島文化の総合調査」が企画され、1954年3月に当時九州大学教授の職にあった金関丈夫を団長とする調査団が沖縄に派遣されることとなった(国分1976)。調査団のメンバーは、金関のほか、永井昌文、国分直一、酒井卯作の4名で、彼らはこの年設立された沖縄観光協会(一般財団法人沖縄観光コンベンションビューローの前身)初の招待客でもあった。

金関は1936年から台北帝国大学医学部教授として、台湾の医学・解剖学の発展と人類学研究の分野で活躍しており、自身が専門とする医学、解剖学、人類学、民族学だけでなく、考古学、文献史学、美術工芸、民俗学、文学、言語学など多分野に通じ、その学問は「金関学」とも呼ばれる(国分ほか編1983)。柳田は、老境に達した自身の代理を務める調査団長として、金関に白羽の矢を立てたのだろう。調査団の目的は、柳田の仮説を人類学、考古学、民俗学などの多方面から総合的に検討しようというものであった。

「南島文化の総合調査」

1954年3月10日、那覇に到着した金関ら調査団一行は、その日のうちに首里城跡や首里博物館等を見学している。調査目的の来訪だったが、金関は博物館に自身が収集した陶磁器類を寄贈しており(図2)、これらの資料は現在の沖縄県立博物館・美術館に引き継がれている。なお、金関の訪問に先立つ1954年3月6日に、首里博物館を訪れたルイス・ビンフォードが考古学者として資料を寄贈した際の写真が、沖縄県立博物館・美術館に残されている(図3)。ビンフォードは当時、生物学を学ぶ大学生であり、学費工面のために軍役についていたが、沖縄での異文化体験を通して民族学・考古学に興味をもつようになり、自身で貝塚の発掘調査を手がけるまでになっていた。沖縄考古学のパイオニアである多



図2 金関丈夫が首里博物館に寄贈した陶磁器類の一部。
A：ひょうたん型酒入（番号1225） B：飴釉広口瓶（番号1226）



図3 ルイス・ビンフォード関連の写真と資料
A：首里博物館に資料を寄贈するルイス・ビンフォード。ビンフォードの伝記 (Yu et al. 2015) 掲載の写真と同一のもの。B：Aの写真の裏書き。1954年3月6日の日付がある。C～E：ビンフォード寄贈品。C：石敢當、D：貝製品（うるま市伊波貝塚）、E：白釉鶴首対瓶（番号1113）。

和田真淳とも交流があったことが、後のジョージ・H.カーとの書簡のやりとりから判明している（安里2012）。

「南島文化の総合調査」のその後

調査期間中、金関が書き送った新聞原稿を発端として、宮良當壯との間で交わされたいわゆる「起源論争」はよく知られている（北條2010）。当時の学界を代表する碩学による激しい論争は、センセーショナルなものだった。柳田や金関が主張したような形で、南方からの人や文化の流入については、現在でも具体的な証拠が得られているわけではない。一方、旧石器時代の沖縄に暮らしていた港川人や白保人については、東南アジアやオセアニア集団との類似が指摘されており、南方起源説が有力となっている（藤田・山崎2022）。

金関は、1954年夏に柳田邸を訪れ、八重山調査の際に撮影した200枚近くのスライドを上映するとともに調査の報告を行った。柳田はスライドを熱心に見、ときどきあらわな感動のようすを示したという（金関1969）。そして、柳田の取り次ぎで金関は、10月の人類学会・民族学協会連合大会の会期中（15-18日）に、天皇に調査の報告を行うこととなった。宮中での報告を終えた金関は柳田邸を訪れ、「どうでした」と問う柳田に、「いや、思ったより不愉快ではありませんでした」と答えたという。「私の無思慮な返事は、先生を深く傷つけたに違いない」と金関は後年述懐している（前掲文献）。

残念ながら、「南島文化の総合調査」自体に関する総括的な報告は刊行されないままとなったが、この調査を契機として、多くの研究課題や問題意識が派生していった。金関らの問題意識は、地元の多和田真淳や稲村賢敷らにも大きな影響を与えたようである。「南島文化の総合調査」にも協力者として参加した多和田は、金関らの調査に大いに刺激されたことを回顧している（多和田1976）。

金関はその後、種子島広田遺跡の調査を指揮し、南島先史人の人類学・考古学研究に多大な貢献をなすことになる。また、国分はたびたび奄美・沖縄を訪れ、各地で考古学調査を実施する傍ら、琉球大学でも講義や実習を実施し、人材育成に取り組んだ。

柳田の「海上の道」という視点は、自然環境と人

類文化を総合的に俯瞰するコンセプトとして、現在でも多くの書籍や研究課題に取り上げられている。SIRIの主導者の一人として『琉球の歴史』（1956）を執筆し、柳田とは逆の立場から沖縄を見つめたジョージ・カーは、後年の著作の中で台湾の南の紅頭嶼（現在の蘭嶼）付近で搭乗していた飛行機が墜落し、救命筏で難を逃れた際の体験を次のように述べている。

「…私達は、柳田国男が『海上の道』で力説して書いた偉大な「海の中の河」、フィリピンから琉球と日本本土に向かって容赦なく流れる海流、黒潮をパドルで漕いで横切ろうとしていたのである。筏にはみんなの数日分の十分な海上糧食を載せていたが、紅頭嶼までたどりつくことが出来なかったら、私たちはおそらくそのまま北の先島（宮古・八重山）の方へ押し流されていたであろう。…」（ケア1983）

本稿をまとめるにあたり、安里嗣淳氏、濱口寿夫氏、泉水英計氏、園原 謙氏、篠原あかね氏、伊禮拓郎氏、大城直也氏にはさまざまに御教示ならびに御援助賜りました。記して謝意を表します。なお、近現代沖縄の人類学・考古学史については別稿（山崎ほか2024）でもやや詳しく取り上げているので、参照いただければ幸いです。

本稿は2024年10月26・27日に指宿市考古博物館 時遊館COCOはしむれにて開催された第9回沖縄考古学会・鹿児島考古学会合同学会の発表資料を改訂したものである。

参考文献

- 安里嗣淳2012『沖縄考古学史探訪』沖縄サンゴ礁文化研究所
- 伊波普猷 1911『古琉球』沖縄公論社
- 沖縄県立博物館 1996『沖縄県立博物館50年史』
- ケア, G. H. 1983「琉球文化財調査計画についてー1961～1964」『沖縄出土の中国陶磁：ジョージ・H・ケア氏調査収集資料 下 沖縄本島編』沖縄県立博物館
- 金関丈夫 1930「琉球人の人類学的研究」『人類学雑誌』45（第5附録）
- 金関丈夫 1978『琉球民俗誌』法政大学出版局：

193～194頁
 金関丈夫 1969「天皇と柳田先生」『定本柳田國男集』月報18
 国分直一 1976「柳田国男と『海上の道』」『沖縄文化研究』3
 国分直一ほか編 1983「特集Ⅰ 金関丈夫博士その飛雄と学問の世界」『えとのす』21
 坂野 徹 2022『縄文人と弥生人』中公新書2709 中央公論新社
 泉水英計 2009「1952年SIRI会議－琉球列島における米国文化戦略の起点－」『国際経営フォーラム』20 神奈川大学国際経営研究所
 泉水英計 2012「ジョージ・P・マードックと沖縄－米海軍作戦本部『民事手引』の再読から」『歴史と民俗』28 神奈川大学日本常民文化研究所 論集28
 泉水英計 2022「米国人歴史家の生きた東アジアの境界領域」蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる－交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』みずき書林
 園原 謙 2000「沖縄県の文化財保護史」『沖縄県立博物館紀要』26
 多和田真淳 1976「感激で一杯」『『特別展 多和田真淳氏所蔵考古資料』沖縄県立博物館
 鳥居龍蔵 1905「沖縄諸島に居住せし先住人民に就て」『東京人類学会雑誌』227
 藤田祐樹・山崎真治 2022「南の海－琉球列島」『季刊考古学』161
 北條芳隆 2010「起源論争とはなにか」『沖縄県史各論編第3巻 古琉球』
 柳田国男（酒井卯作編） 2009『南島旅行見聞記』森話社
 山崎五十麿 1930「鹿児島県大島郡徳之島面縄加塚に就て」『考古学雑誌』20（10）
 山崎真治・谷川 遼・樋泉岳二 2024「資料紹介 會津八一記念博物館所蔵の沖縄関係考古・民俗資料について（上）」『會津八一記念博物館 研究紀要』25
 琉球政府行政主席官房 1954『ペルリ百年祭記録』『情報特集』第27號
 Binford, L. R. and Sabloff, P. L. W. (1998) Conversations with Lew Binford: Drafting the

New Archaeology. University of Oklahoma Press. 108p.
 Yu, P., Schmader, M., Enloe, J. G. (2015) “I’m the Oldest New Archaeologist in Town”: The intellectual evolution of Lewis R. Binford. Journal of Anthropological Archaeology, Vol.38: pp.2-7